

インターネット古書店・ほんのたまごミニコミ紙

miniたま (みにたま)

2019. 3 第100号

蒔絵硯箱の桜

4月に新元号発表、5月に新天皇即位と改元で、日本中が沸き立っていますが、今年はもう1つ、秋に大きな暮らしの変化がやってきます。10月に予定されている5年半ぶりの消費増税です。2014年4月に8%に引き上げられた消費税が、今度は10%になります。

「以前は消費税の増税が近づくたびに硬貨が目玉玉が注目された」と、3月18日付の読売新聞首都圏版朝刊コラム「編集手帳」は伝えていました。「1989年の導入時には、1円玉が足りない」と大騒ぎになった。このときは3%でした。本体100円の買い物で税込み103円を支払った時代です。そして「1997年に5%に上がる時は、店が5円玉をかき集めた」そうです。

しかし今回は「小銭の存在感が薄い」と、コラム氏は続けています。本体100円の買い物で税込み110円。つまり支払いがギリよくなるから、1円玉や5円玉の出番が少ないと予想されるでしょう。しかしそれだけではないようです。クレジットカードや電子マネーの登場が、小銭不要の風潮を作り出しています。政府も、中小店でキャッシュレスの買い物をした人にポイントを与える、と消費税対策を打ち出しています。

キャッシュレスは確かに便利ですが、財布を開いて現金を支払うことの痛みがなくなり、儉約意識が薄れるのでは……と、いささか心配になります。

インターネット古書店
ほんのたまご

インターネット古書店
ほんのたまご
hontama.com
送料200円

～ショップサイト再開のご案内～

休業しておりましたショップサイトを再開しました

ご利用をお待ち申し上げております。

ほんのたまごは文芸作品や、自然科学・人文・出版・社会・映画などの古書を販売するインターネット古書店です。

ほんのたまご

著作権は放棄していません
本紙に掲載されている画像・文章の
無断転載を禁止します

発行 インターネット古書店 ほんのたまご
メールアドレス nasuka@hontama.com
サイト URL <http://www.hontama.com>

たまたま本の話

第100回 黒澤明はてんかんだったのか？

柏瀬宏隆・加藤信

日本が誇る世界的巨匠・黒澤明(1910ー1998)は、戦中のデビュー作「姿三四郎」から数えて生涯にちょうど30作品を監督している。時系列でいうと「赤ひげ」までの23作と「どですかでん」以降の7作とでは作風が大きく異なっている。「姿三四郎」(1943年)から「赤ひげ」(1965年)までの23作は、ダイナミックかつスピード感にあふれる動的な作風で、22年かかっている。そして「どですかでん」(1970年)から遺作となった「まあだだよ」(1993年)までの7作は、逆にゆったりとした静的な作風で、23年かかっている。つまり監督人生の年月をほぼ2分して、前半と後半とで全く別人のような映画を作ったのが黒澤だったと言えるのである。

その点については今までも多くの識者が指摘していたことだが、今回それは何故かを改めて考えることになった。柏瀬宏隆と加藤信の共著「黒澤明の精神病理」(2002年4月、星和書店刊。2010年10月に増補版)という興味深い本を読んだからである。著者の2人、柏瀬宏隆は日本精神神経学会評議員などを歴任した医学博士、加藤信は日本アルコール・薬物医学会評議員などを歴任した同じく医学博士(ともに2002年現在)。この精神科医2人が書いた本書は、学術誌に掲載された論文8編で構成されている。

筆者たちの主張は、まずこのように始まる。黒澤の作風の変化のきっかけは1971年、61歳の時に起こした自殺未遂事件にあるのではないか——という指摘だ。「『どですかでん』の頃より、黒澤映画およびその作品づくりは次のような明らかな変貌を遂げている」と書いて、その根拠を掲げる。重要なポイントなので引用する。

1. それまで1年にほぼ1作品ずつ製作されていたのが、自殺企図後からはしばらくの間5年ごと1作品にペースがダウンしていること
2. それまで白黒映画であった作品がすべてカラー作品となっていること
3. 56歳の時、黒澤プロが映画会社・東宝から完全に独立したこと
4. 作風は面白いストーリー性、娯楽性、躍動性、スリルとサスペンス性が影を潜め、いわば動的世界から静的世界へと変容してきていること。すなわち、自殺企図前の作品には、「酔いどれ天使」「羅生門」「七人の侍」「用心棒」のように動的で、雄々しく、激しく、ドラマチックな内容の作品が多いのに対して、自殺企図後の作品には、特に最後の3作品「夢」「八月の狂詩曲(ラプソディー)」「まあだだよ」に見られるように逆に静的で絵画的で、穏やかさ、優しさが伺えるようになること

いずれも納得できる指摘であろう。こうした点を取り上げて、「どですかでん」以降の作風の変化を、年齢からくる創作エネルギーの減退や、三船敏郎という俳優の不在という言葉でくってしまう批評が、これまでも多く見られた。しかし筆者たちが違うのは、ここからである。作風の変化の背景に、黒澤のある精神病理があったとする説を展開するのだ。その病理とは「てんかん」であったというから驚く。他ならぬ黒澤自身が1978年、68歳の時に書いた自伝「蝦蟇の油——自伝のようなもの」の中で、自分がてんかん持ちであることを告白している。「私(黒澤)の脳の大動脈は、脳血管のレントゲン写真を撮って解ったのだが、異常に屈折している。通常は真直ぐなのだそうで、この異常は先天的なもので、真性てんかん症だと診断された。そういえば、子供の時は、よくひきつけを起こした」この記述から筆者たちは、黒澤を側頭葉てんかん、とくにゲシュヴァイント症候群と推測する。黒澤の性格や作風が、まさにゲ

シュヴァイント症候群の特徴的症状に酷似しているというのだ。少年時代から見られる負けん気の強さや強情さは、同症候群の特徴的症状である「情動の過大」に該当し、仕事の完全主義ぶりや粘着性は「変形過少」、黒澤映画が性を取り上げない点は「性的活動の低下」、緊張感あふれる画面は「認知の強化」、強烈なヒューマニズムは「哲学的関心・道徳主義」、ほぼすべての作品の脚本づくりに参加したり、絵コンテを描いたりする点は「過剰書字」に該当するという。まさに精神科医らしい実証的考察がなされている。

ただし、これ以降は推測の世界に入っていく。自殺未遂事件以降の作風の変化について、筆者たちはこう書いている。「これは、筆者のまったくの憶測であり推測の域を出ないのであるが、自殺企図後に初めててんかんであることが判明し、黒澤監督はてんかんの治療を受けることになったのではないであろうか。(すると、61歳までは、てんかんをまったく無治療で過ごしてきたことになる?!)そして、てんかん者としての治療を受けることによって、以後の作品が穏やかになり、対立と葛藤の強烈なダイナミズムが失われてしまったのではないであろうか。治療を受けることによって、普通人としての平穏な生活は送れるであろうが、創造性の持つ激しさ、鋭さ、迫力は削ぎとられてしまったと考えられるのである」

以上はあくまで筆者たちの推測ではあるが、それなりの説得力があるように思う。作風の変化を、単に年齢から来るエネルギーの減退とするよりも、訴えかけてくるものは強い。著者の1人、柏瀬は1995年から確信を持って「黒澤監督・てんかん説」を日本病跡学会で発表し続けていた。その当時、黒澤はまだ存命中だったが、柏瀬自身が主治医でないこと、黒澤自身が公表したものに基いて考察していること、クローズドの学会および学会誌でしか発表していないこと、などから医師の守秘義務違反という倫理的批判も受けることはなかったという。(こや)